に参加し、併せ講員（代参者）をこの護摩修行に導引させたことを物語るものであろう。

このような後山山上講の成立現象は、近世の後山信仰のあらたな展開を示すものといえる。それは美作の国峯（くにみね）である後山に大峯信仰がうつって、近国在地の山伏集団が働きかけておこった信仰現象であった。こうした後山をとりまく近国在地の修験の後山への働きかけを反映して、江戸末期になると、後山道仙寺が直接先達、山伏を任命し、後山先達が山上講を組織するに至ったことは注意される。既に先学の指摘がある如く、④江戸末期から明治にかけて後山山上講は多数簇生しているが、その詳細な裏付けはなされていない。それを論じる遑はないが、歴史的には、後山道仙寺の二十三代座主舜応法印が、天保十四年から弘治年間にかけて後山修験の組織を確立・編成し、「後山修験道」（当山派）の法式を規定するほか、あらたに柴燈護摩修行の伝授がおこなわれたことを指摘しておきたい。この舜応法印の画期的な意図によって、あらたに生れた後山修験、先達が『後山御条目』をまもって正規の修行をつとめ、他方では村落内で活発な布教活動をおこなって、後山信仰を美作農民に浸透させたと思われる。その結果、各部落に強力な信者を輩出させ、後山登拝の信仰組織を簇生させたのであろう。

ともあれ、以上の考察から、美作地方の後山山上講は国峯である後山に大峯信仰がおよんだ近世中期後に成立し、山伏集団の布教活動を媒介にして、近世末期の天保年間から増加したものと結論づけられる。それは又、民衆信仰一般の展開する時期であり、山岳信仰においても、山岳代参講が成立展開する時期と符合するものと考えられるが、この点については紙面の関係上省略せざるを得ない。後日、機会をあらためてその詳細な報告をしたいと思う。

註① 「東作誌」（『新訂作陽誌』七、所収）。
② 五来重教授「熊野三山の歴史と信仰」（『古美術』42・昭和48年）。拙稿「地方に設定された熊野三山の信仰」（『印度学仏教学研究』第二十一巻第一号）。
③④ 『美作の民俗』（昭和38年）

梁簡文帝撰法宝聯璧について

大内文雄

前年の研究発表会においては、「梁代における仏教関係類書の編纂と諸経中要事について」と題し、梁代に編纂された仏教に関する類書の概要を述べた。今回は、それらの中でも最大の規模を持つ簡文帝蕭綱による法宝聯璧を取り上げ、その編纂に携わった人々にどのような人物がいたかを中心にして、些か考えている所を述べてみたい。

法宝聯璧は、歴代三宝紀巻十一によれば、簡文帝蕭綱が皇太子であった頃に、躬ら仏典を覧て分類を指図し、多くの学士を動員して編纂したものとある（㊀四九・一〇〇・a）。しかし、事実は、蕭綱が晉安王として雍州（湖北・襄陽）に居た頃から、既に

編纂事業が行われていたもので、その完成を見たのは中大通六年（五三四）である（南史四八・陸罩伝）。つまり、蕭綱が兄の昭明太子蕭統の後を継いで皇太子となった中大通三年（五三一）から算えても、少くとも三年以上の歳月をかけて編纂された類書である。同じ陸罩伝には、この編纂事業を遂行した者として蕭子顕等三十人がいたことを記しているが、一方広弘明集巻二〇に収録してある蕭繹―後の元帝―による法宝聯璧の序を見ると、蕭綱の協力者として蕭繹以下三十八名の爵位姓名年齢等が列記されている。

法宝聯璧の巻数については、書物によって相違があり、例えば、仏教側の記載として歴代三宝紀巻十一には二〇〇巻、大唐内典録巻十には二二〇巻とあり、法琳の弁正論巻三を見るとその内容として四〇〇篇余りがあったと記されている。一方、正史では、梁書簡文帝紀に三〇〇巻とあり、これは南史も同様である。但し、隋書経籍志には蕭繹撰と記す内典博要を載せるにもかかわらず、この法宝聯璧は記録されていない。

次に法宝聯璧の流布の下限についてであるが、隋書経籍志（唐顕慶元年―六五六―成立）にはその名が見えず、また法苑珠林（唐総章元年―六六八―成立）の巻一〇〇雑集部には記録されているが、その記事は歴代三宝紀をそのままに承けているものであり、編者の道世が果して法宝聯璧を見ていたかどうか確証がない。一方、続高僧伝巻二〇・宝厳伝を見ると、彼は経律異相や法宝聯璧を利用していたことが記されている（㊇五〇・七〇五・b～c）。宝厳の没年ははっきりしていないが、唐・太宗の貞観年間（六二七～六四九）初頭に七十余歳で没しており、従って続高僧伝の記事による限り、法宝聯璧はおおよそ唐初までは存在していたと言い得よう。また道宣自身も、集神州三宝感通録巻下に述べるように、内典博要と並べて法宝聯璧の名を記している。道宣も参考にしていたのである。

次に、蕭繹の法宝聯璧序に列記する編纂者について、若干を述べてみたい（人物名の頭の番号は蕭繹の序に言う序列を示す）。この中には伝未詳の人物も何名か含まれ、その全体は明らかにしがたいが、例えば、梁書巻四九庾於陵伝附(31)庾肩悟伝に、

初め、太宗（蕭綱）藩に在りしとき、雅に文学の士を好む。時に肩悟、東海の(16)徐摛・呉郡の陸果（(22)陸罩の父）・彭城の(9)劉遵・(26)劉孝儀・（孝）儀の弟(37)威と同に賞接せらる。

とあるように、蕭綱が晉安王であった頃よりの僚属が名を列ねており、この中には(5)王規も含まれる。そして彼等を含めての大体は、「少きときより清雅にして学行あり、工に文を属る」（梁書四一(9)劉遵伝）、また「風神清雅にして頗る善く文を属る」（陳書二一(35)謝嘏伝）と言うように、文章の才によって盛名を得た人物である。また彼等の中にはそれのみに止まらず、積極的に書物を編纂する者もいた。(2)蕭子顕や(32)庾仲容等がその例である。[1] この他、(3)到溉や(14)陸襄は劉之遴や張纘等と蕭範の齋した漢書の真本なるものの異同を校定しているし（梁書四〇劉之遴伝）、(38)蕭愷は蕭綱の命によって、他の学士等と共に顧野王の撰した玉篇を刪改している（梁書二九蕭愷伝）。また一方では、仏教的事蹟がその伝に記されている者がいる。例えば梁書巻四〇到溉伝には、

　　慨の家門は雍睦にして、兄弟は特に相友愛す。初め、弟の洽と常に共に一斎に居す。洽、卒す。後、便ち捨して寺となし、因りて腥羶を断ち、終身疏食す。

とあり、また⑸王規は、中大通二年（五三〇）より都城の外にある鍾山の宗熙寺に住んでいたことが記されている。また、文学の面において蕭綱に対する影響の最も大きかったとされる⑯徐摛も、仏教的素養を十分に持っていた人物であった。

これらの人々は、正史にその仏教的事蹟が記録されている言わば積極的な例である。しかし梁代の士大夫にとって、仏教的知識がその素養として不可欠なものであった[3]ことは言を俟たない所であり、それがまた、経律異相等とは異り、専ら在俗の知識人によって、法宝聯璧と言う大部の類書を成立せしめ得た大きな要因であったと考えられる。

蕭繹が法宝聯璧序に、「鹿園の深義、龍宮の奥説に至っては、遠く学徒に命じ、親ら講肆に登る」と書いたように、蕭綱自ら指揮を取り、自分の周囲にいる当時著名の文学の士を総動員しての編纂事業が行われた結果、「百法の明門、茲に総べ備わる」（蕭繹・法宝聯璧序）と言われ、また「四百許篇」（法琳・弁正論）二〇〇巻、或いはそれ以上と言われる当時最大の仏教的類書が完成したのである。但し、これがどのような体裁を持っていたものかという点に関しては、その残簡すら残されていない以上、類推するより他に方法がない。今は道宣の集神州三宝感通録の記事によって、その中に高僧の伝記が含まれていたと言うことと、大屋徳城氏の「高麗続蔵雕造攷」によって、高麗の義天の編纂した釈苑詞林が法宝聯璧をその材料の一つとしたという氏の指摘を承けて、或いは法宝聯璧中には蕭綱自らが撰した碑文等も含まれていた可能性が考えられると言うに止めておきたいと思う。

註

① 蕭子顕には後漢書一百巻・斉書六十巻・普通北伐記五巻・貴倹伝三十巻等、庾仲容には抄諸子書三十巻・衆家地理書三十巻・列女伝三巻等の著書がある。この他、⒇張緒の兄である張緬・張纘には、前者に後漢紀四十巻・晉抄三十巻・抄江左集が、後者に鴻宝一百巻の著作があり、㉒陸罩の父陸杲には沙門伝三十巻の著書があるなど、類書編纂の仕事につながる活動をしている者が散見する。

② 一例として、⑸王規の子の王褒を挙げれば、彼は「幼訓」を著して三教を兼ね学ぶことを説いている。そこには次のように言う。

　　……既崇周孔之教、兼循老釈之談、江左以来、斯業不墜、汝能脩之、吾之志也。　（梁書四一・王規伝附）

本願内景の表現たる名号

井上恵樹

親鸞は名号をもって本願招喚の、正しく現群生海になされた勅命であり、群生の行ずべき往生行の、現群生海への廻向であると示し、それは選択本願そのものの在り方であると示している。その道見はいかなる背景を内に秘めて迸り、吐露せられたのであろうか。